

平成26年(ワ)第29256号 損害賠償請求事件

原告 阿部 宣 男

被告 松崎 参

準備書面 (16)

平成29年 4 月3日

東京地方裁判所民事第37部合議A係 御中

原告訴訟代理人弁護士 小川 隆太郎

同 小田川 綾音

同 高井 信也

同 中島 広勝

同 永里 桂太郎

同 細川 潔

同 本田 麻奈弥

同 山下 優子

同 渡邊 彰悟

原告訴訟復代理人弁護士 石原 敬之

本書面では、小波意見書（乙 22）に対する反論を準備する。

第1 本書面の意味と原告の基本的な考えについて

1 本書面の意味について

原告はナノ銀に関する基本的な原告の立場を準備書面（13）において主張した。その基本的な原告の立場からすると、本来乙22の小波意見書に対する反論は必要のないものである。しかし、もちろん、原告として小波意見書の内容を受容するものではないので、本書面において小波意見書を取り上げて反論をするものである。

ただ、補足的に言えば、仮に、被告が小波意見書のような表現において批判的な言説を述べていたとしたら、名誉毀損として訴えることはなかったということではきよう（但し、小波意見書の最後の「5 ニセ科学を批判することの意義について」は受け容れられない）。

2 ナノ銀による放射線量低減の研究について

また、次の点も重要と考えるので指摘しておきたい。被告は、すでに準備書面（15）において、「被告は、原告が行った各実証実験において、各報告書等に記載されている数値の変化が生じたことを否定するものではない」（同書面3頁）と述べている。かかる論述は極めて重要である。即ち、これまで普通想定された認識とは異なる事態・数値の動きがみられているという結果が存在していることを被告も認めていることになる。ここで問われるのは、その数字をありのままに捉えて、そこにみられる動きをどう科学的にとらえようとするのか、それとも、これまでの科学的な知見におさまらない事実をその枠内の説明にとどめようとするのかという事実に対する姿勢である。

特に、ナノ銀による放射線量低減の研究において、現時点で最も重要なのは実験の信頼性である。つまり、計測されている放射線量の低減が、何らかの実験ミスや測定誤差に起因するものではないことを立証するのが重要である。そのため、原告らは、間違いや誤差を減らす工夫を凝らしながら、何度も何度も繰り返し実験を行い、その結果を分析してきている（これまでの放射線測定回数や測定に費やした時間は限りない）。

ナノ銀を混ぜるような方法で放射線量が低減する現象が、いわゆる従来の科学の常識からかけ離れていることは、原告らも十分に承知している。実験事実として放射線量が低減していることを何度も確認して、むしろ従来の科学の常識に合わない

からこそ、極めて重要な現象の発見だと考え、膨大な手間をかけて研究を行っているのである。

したがって、現時点では、実験の手法や実験データの分析についての批判は、それ自体としての意味はあるものの、「(自分の知っている)科学の常識に反している(合わない)」という批判は意味を持たない。

小波氏は、ナノ銀による放射線量低減を、まるで荒唐無稽な科学法則の主張であるかのように言って批判するが、原告らがまず主張しているのは、被告も「原告が行った各実証実験において、各報告書等に記載されている数値の変化が生じたことを否定するものではない」(被告準備書面3頁)と認めているように、実際に放射線量低減が起こっているという実験結果であり、現時点では、その実験結果に十分に信頼性があるか否かが重要な論点である。

また、小波氏は、化学的なエネルギーレベルの反応が原子核に影響を及ぼすことはないと主張しているが、これは、一般に、科学の対象があまりにも広がる一方、細分化が進み個々の科学研究分野の動向に疎くなりがちで、ある特定研究分野の最前線に疎くなった科学者一般の「常識的見方」というに過ぎない。

実際、後で詳論するように、凝縮系核反応や低エネルギー核反応と呼ばれる現象を研究する分野では、一見、化学的なエネルギーレベルの反応しか働かないだろうと思われる環境下で元素変換(核反応の一種)が起きているとする実験結果が多数報告されている。

例として、東北大学の岩村康弘特任教授らによる元素変換実験が挙げられる。この実験では、パラジウムの薄い膜に重水素気体を透過させることで別の元素が現れる現象が観測されており、まさに化学的なエネルギーレベルの操作が元素変換を引き起こしている一例である。岩村氏の論文は長い間通常の学会では受け入れられなかったが、2002年に日本応用物理学会で受理された。このように、化学的なエネルギーレベルの反応が原子核に影響を及ぼすことは無いという従来の科学の「常識」に合わない実験結果は他にも報告されており、その研究に注力している研究者も世界には少なからず存在している。ちなみに、岩村氏らの研究成果への理解が進み、国家の戦略的イノベーション研究(ImPACTの中の「核変換による高レベル放射性廃棄物の大幅な低減・資源化」)のプロジェクトとしても取り上げられている。この部分については第2・6のところで詳論する。